

合唱部活動の地域移行と地域展開

— 現場から考える「つなぎ方」—

合唱指揮者 蓬沼喜文

はじめに 近年、「部活動の地域移行」という言葉が、合唱の現場でも頻繁に語られるようになりました。背景にある顧問教員の負担軽減という課題は、私たち合唱に関わる者にとっても、決して他人事ではありません。一方で、合唱という活動の性質を考えたとき、「学校から地域へ活動の場を移す」という単純な構図だけでは、現実がうまく説明できない場面も多くあります。合唱は、人・時間・空間・信頼関係の積み重ねによって成立する、極めて“現場依存度”的高い文化活動だからです。

合唱団における「地域移行」の難しさ

合唱活動には、指導者、ピアニスト、練習場所、団員の確保、保護者の理解と送迎、運営費用など、多くの要素が複雑に絡み合っています。学校部活動という枠組みの中ですら、これらを安定的に維持することは簡単ではありません。ましてや、地域に新たな合唱団体を立ち上げ、継続的に運営していくことは、相当な人的・時間的エネルギーを必要とします。

現在、「地域コーラス」として大会に参加している団体の多くは、もともと存在していたジュニアコーラスや学校外団体が、制度の変化に対応する形で位置づけを変えたケースが中心であり、ゼロから地域で合唱の受け皿が生まれている例は、まだ限られているのが実情ではないでしょうか。

「移行」よりも先に考えたい「連携」

本来の意味での「地域移行」とは、単に活動の主体を学校外に移すことではなく、学校と地域が、合唱活動を支える役割をどう分かち合うかという問い合わせかもしれません。制度や大会規定が整っていくこと自体は、前向きな動きです。しかし、「制度が整うこと」と「現場で合唱が無理なく続くこと」との間には、依然としてギャップがあるように感じています。合唱の地域化は、「学校か地域か」という二者択一ではなく、学校と地域が緩やかにつながり合う「地域連携」を土台にして初めて、現実味を帯びてくるのではないでしょうか。

合唱を継続していくための提言

—現場目線で考える、現実的なかたち—

こうした考え方から、現段階では次のような形が、多くの地域・学校で取り入れやすいのではないかと感じています。

1. まず何よりも、「指導したい」という思いを持つ顧問教員を尊重し、無理のない関わりができる環境を整えることを出発点とする。
2. 生徒が地域へ分散するのではなく、地域の指導者が学校に出向く形を基本とし、学校で育まれてきた活動の流れや文化を生かす。
3. 人数の少ない部活動については、複数校合同の体制を整え、必要に応じて外部指導者が定期的に関わる。コンクールや演奏会前には、数回の合同練習を行う仕組みを設ける。
4. 学校の中だけで完結させず、学校と地域の指導者が対話を重ね、役割を分担しながら合唱活動を支える「地域連携」の関係を築く。
5. 費用面についても、学校・地域・個人が、それぞれ無理のない範囲で負担を分かち合える仕組みを検討する。

おわりに 合唱の地域移行は、全国一律の制度や正解が存在するものではありません。むしろ、各地の現場で悩み、試行錯誤しながら積み重ねられてきた実践こそが、合唱文化を支えてきたのだと思います。「移す」ことを急ぐよりも、まず「つなぐ」。人と人、学校と地域、世代と世代を、合唱でつないでいく。その積み重ねの先にこそ、合唱の地域化が自然な形で根づいていく未来があるのではないでしょうか。

❖ プロフィール 蓬沼 喜文 (はすぬま よしふみ) ❖

合唱指揮者・声楽指導者。国立音楽大学声楽科卒業。小川雄二氏に声楽を、ヘルムート・ピルス氏(ワイン)、ドュエル・エコルズ氏(ドイツ)に合唱指揮を師事。国内主要合唱コンクール全国大会において、延べ26回の出場を重ね、金賞・1位内閣総理大臣賞など多数受賞。海外でもコーラスオリンピック、ミュンヘン国際合唱コンクールほかで総合第1位、優秀指揮者賞などを受賞している。現在は「歌声の響く街」を掲げ、地元さいたま市を中心に合唱の普及と指導に取り組む。日本合唱指揮者協会会員。埼玉県教育功労賞受賞。

